

第4章 京都大学北部構内BF33区の発掘調査

清水 芳裕

1 調査の経過

大正12年、濱田耕作氏によって京都大学農学部構内に遺跡が存在することが明らかにされて、調査がおこなわれた〔梅原23〕。現在の農学部総合館北棟の北側にあたる地点で、当時、縄文時代の遺跡は山城地方ではじめての発見であった。遺跡の主要部は工事によって破壊されているものと判断されていたが、その後、図32に示した北部構内における校舎建築にともなう周辺地域の調査によって、縄文前期から晩期にわたる遺物が多数出土し、遺跡が残存していることが明らかになった。11地点では前期～晩期の土器、石器と配石遺構が〔中村徹74b〕、12・13・16地点では前期～晩期の遺物と晩期の土壙墓が〔中村徹74a、中村徹75、泉ほか77〕、55地点では、中期～晩期の遺物が、56地点では縄文時代の泥炭質土層が存在し、中期～晩期の遺物のほか多数の植物遺体やヒトの足跡列が発見された〔泉・宇野80〕。また54地点では、中期、後期の縄文土器とともに、弥生中期の土器をとまなう

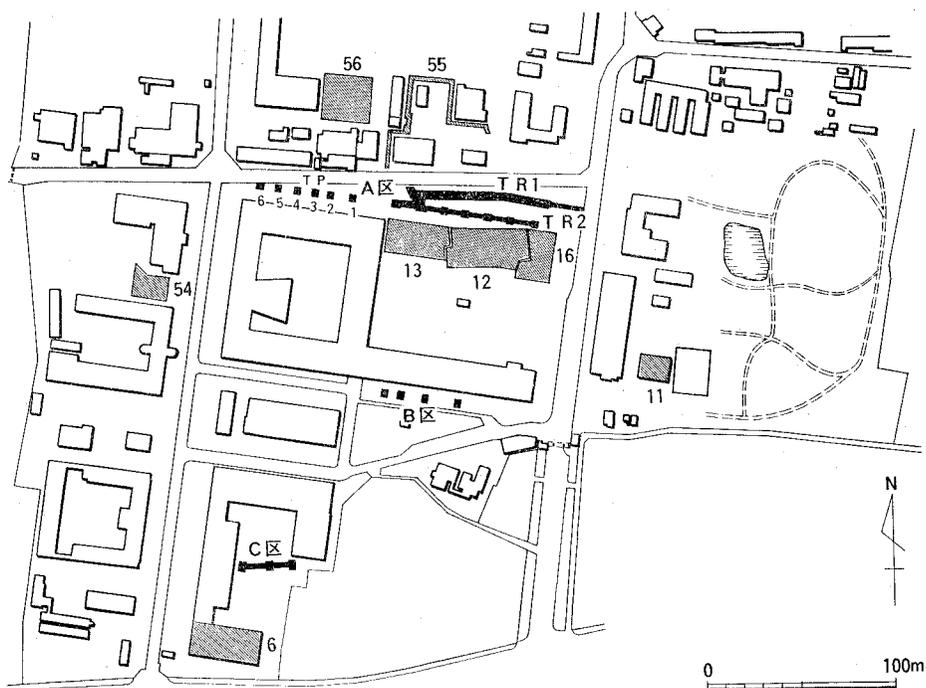


図32 調査区と周辺の縄文時代遺物出土地点 縮尺1/4000

方形周溝墓3基と溝が発見され〔岡田・吉野79〕, 6地点では, 後期および晩期の縄文土器と弥生前期の土器, 石器が出土している〔石田・中村72〕。

このような経緯をもつ地域に実験排水管理設工事が計画されたため, 発掘調査をおこなうことにした。調査範囲は, 農学部総合館北側に2ヶ所の試掘溝と6ヶ所の試掘坑(図32-A区), 南側に4ヶ所の試掘坑(図32-B区), および理学部本館中庭の試掘溝(図32-C区)の計787 m^2 である。

2 地形と層位

A区は東から西へ下がる北白川扇状地の先端に位置し, 現地表面も東端で標高64.8m, 西端で63.9mとその旧地形の傾斜を残している。TR1, TR2の層位は, 中央部を境にして東西で大きく異なる。Y=2645付近から東では近世耕土下に古代・中世の遺物を含む赤褐色土と茶褐色土とが堆積し, さらに東端部では, 中世に白砂を採取したと考えられる土坑埋土が厚く存在する。一方西半では, 古代・中世の遺物包含層は大部分削平され, 近世耕土下に縄文中期末を中心とする遺物を含む黒褐色土が30~40cmの厚さをもって堆積する。その下には, それぞれ黒褐色, 灰白色, 暗黒褐色を呈する砂質土と黄灰色砂がみられるが, いずれも遺物を含まない(図33左)。TR2では, 黒褐色粘質土下に厚い赤褐色粘質土が堆積し, 縄文中期中葉の土器と石器が出土する(図33右)。

試掘坑TP1~6では, 基本的には表土下に中・近世の土器, 陶器, 瓦を少量含む赤褐色土, 灰褐色土, 茶褐色土の3層が存在し, 遺物を含まない黄砂がこれにつづく。黄砂は東に薄く西に厚い堆積を示し, TP6では1.2mに達する。TP1, TP2では, この黄砂を介して縄文時代の遺物を含む灰白色砂礫層が続く。TR1・TR2とTP1~6の間

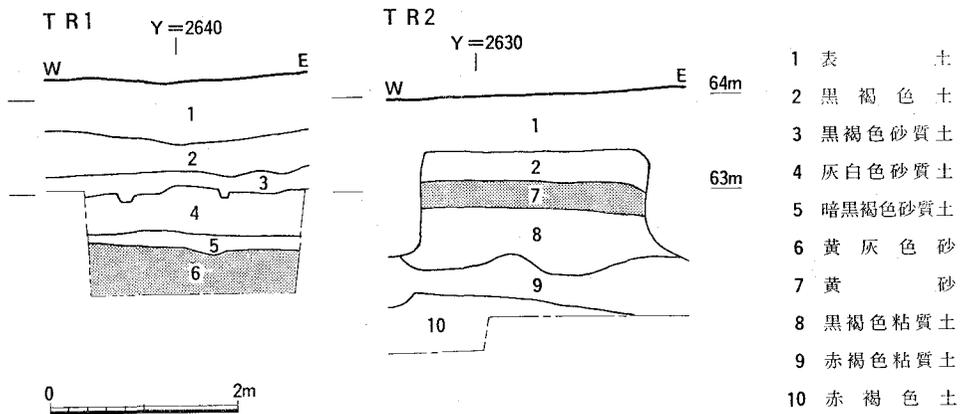


図33 調査区北壁の層位 縮尺1/80

には層位の連続性は認められず、TR1とTR2でみられる西へ向かって下がる遺物包含層を形成した扇状地の地形はこの間で変化している。このような状況からTP1～6付近には、この扇状地をとりかこむ谷状の地形が存在したことを知ることができる。また、B区では表土下に黄砂が厚く堆積し遺物が皆無であった。以下、遺構と遺物が良好に残存していたTR1とTR2を中心に述べる。

3 遺 構

TR1ではY=2645付近から西のほぼ全域に分布する黒褐色土で、中期末の土器が出土するが、なかでも3ヶ所の密集する地点が明らかになった。これが住居跡SB1・SB2と土坑SK2である(図34)。いずれも古代・中世の土坑と溝、および現代の建物基礎によって破壊された部分が大きく、遺構の全貌は明らかではないが、SB1では焼土を含む炉をもち、SB2では方形の石組炉を中心にして隅丸形状に溝がめぐり、柱穴と考えられる土坑をともなっている。またSK2では、これらと同時期の土器が密集して出土する。このほかに、西端部の土坑SK1からは、船元式・里木Ⅱ式の土器が中期末の土器をまじえずに出土している。

SB1(図版14, 図35) 遺物包含層直下の黒褐色砂質土を掘り込んだ焼土を含む土坑が検出された。それは直径約60cmの円形をなし、中央部で検出面から15cmの深さをもつ。出土遺物はこれを中心にして集中して分布していること、焼土中には遺物が混在していないので焼土を廃棄した土坑とは異なり、炉であることは明らかである。昭和51年度の調査で、南東約2mの位置から石棒の一部が発見されていることなどから、遺構全体の輪郭は攪乱によって不明であるが、炉を中心にして土器、石器が集中して出土することから住居跡のほぼ中央部にあたるものと考えている。

SB2(図版15, 図35) SB1と同様に黒褐色砂質土を掘り込む遺構で、幅20～30cm

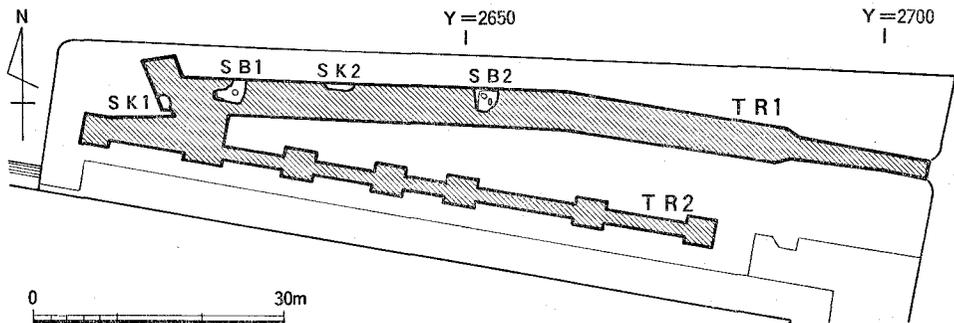


図34 調査区の遺構配置図 縮尺 1/900

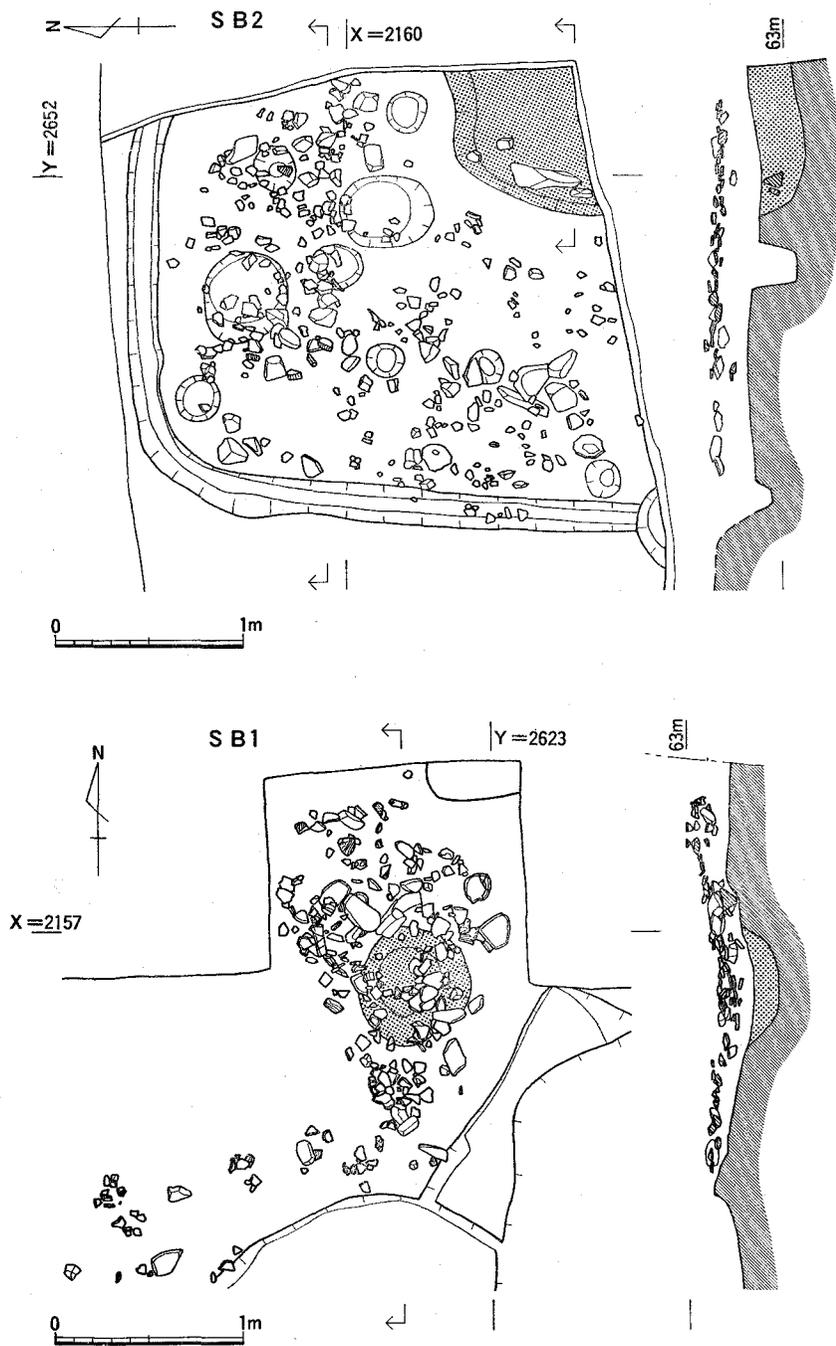


図35 住居跡S B 2・S B 1 縮尺1/40

の溝が隅丸方形状にめぐり、これに囲まれて径20～50cmの土坑が9個検出された。そのうちのいくつかは柱穴にあたる。このほかに加熱によって表面が剝落した石と焼土を含む方形状の土坑がともない、これが住居跡の炉にあたる。この遺構にとまなう土器はSB1と同様に、すべて中期末のものである。炉はこの時期の石組炉に通有な、平面をもつ1、2個の石を短辺に構築するものと同様の形態をなし、剝落した面をもつ石がこれにあたる。長辺には炉内に残存する円礫を連ねたものと考えられる。住居跡全体の規模は明らかではないが、中央に炉が存在していたとすれば、一辺がほぼ5mとなる。

SK2(図34) SB1とSB2のほぼ中間に位置し、残存部分がわずかで、遺構の輪郭を捉えることはできていないが、これらと同時期の土器が集中する遺構である。土器のほかに径10～20cmの礫を多数含み、SB1、SB2と同様の状況をもつことから住居跡の一部と考えている。TR2では、Y=2632付近で黒褐色粘質土下に赤褐色粘質土が厚く堆積する。遺構は確認できなかったものの、赤褐色粘質土からは、縄文中期中葉を中心とする土器の大形破片や底部が石鏃や石錘などの石器類とともに多量に出土している。

4 遺物(図版16～18, 図36～39)

遺物の出土状況は、TR1とTR2とで大きく異なる。TR1では、黒褐色土とこれを含む遺構から縄文中期末の土器と石器が出土している。これに対してTR2では、TR1と一連の黒褐色粘質土から中期末の遺物が出土するとともに、さらに北白川下層Ⅲ式土器、大蔵山式土器各1片をともなって、多量の船元Ⅱ～Ⅳ式、里木Ⅱ式の土器が出土する。

図36のⅢ1～Ⅲ5はTR2赤褐色粘質土、Ⅲ6・Ⅲ7はTR1のSB2、Ⅲ8はSB1、Ⅲ9はTR2黒褐色粘質土から、それぞれ出土したものである。Ⅲ1は、胴上半部で弱くくびれ、山形の口縁部をもつ深鉢形土器である。口縁上端に縄文が施され、外面には山形口縁の位置に対応して楕円形の刻みを付した貼付け凸帯文がめぐる船元Ⅱ式土器である。Ⅲ2・Ⅲ3はⅢ1と同様の器形をなし、深・浅・深の縄文地に竹管による弧状沈線文を口縁部にめぐらせる土器で、船元Ⅳ式にあたる。Ⅲ4はキャリパー形の器形をなし、口縁端部に文様帯を区画する沈線を施し、その下に撚糸文を地文にして竹管による直線文、波状文を配する深鉢で、焼成はよく堅緻で器壁は薄い。Ⅲ5は外方へまっすぐ立ち上がり、口縁部に直線および波状の沈線をめぐらせた深鉢で、器壁は厚く赤褐色を呈している。Ⅲ4・Ⅲ5は里木Ⅱ式土器である。Ⅲ6は胴上半部からやや外反する器形をなし、口縁部に羽状沈線文で埋めた楕円形の区画文と橋状把手をめぐらせ、胴部には多条の垂下沈線文が施される。Ⅲ7は直線的に立ち上がる深鉢で、口縁部直下に縦の沈線文を配する。Ⅲ8は胴部

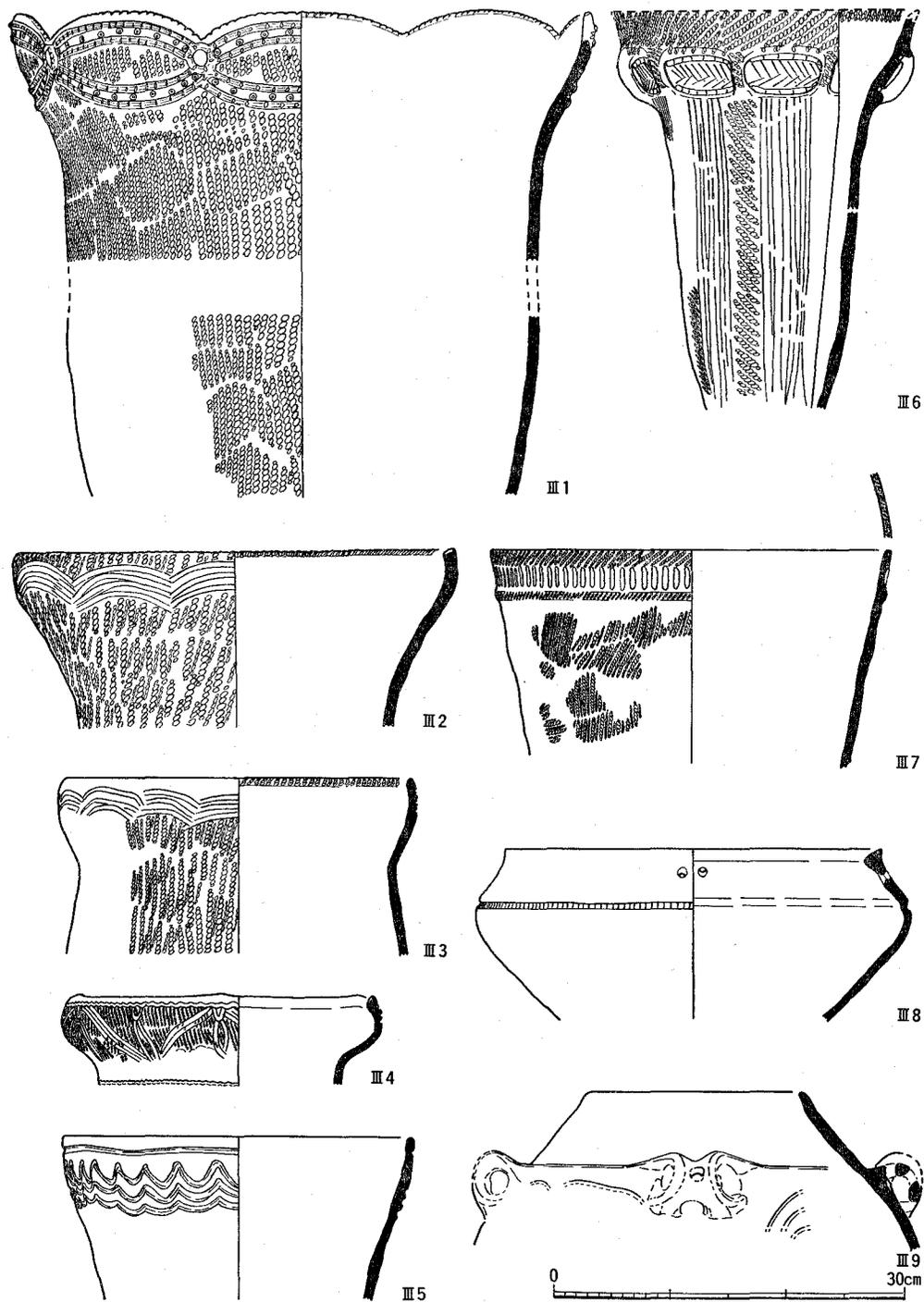


図36 TR 2 赤褐色粘質土出土の縄文土器(Ⅲ 1～Ⅲ 5), SB 1 出土の縄文土器(Ⅲ 8), SB 2 出土の縄文土器(Ⅲ 6・Ⅲ 7), TR 2 黒褐色粘質土出土の縄文土器(Ⅲ 9) 縮尺1/6

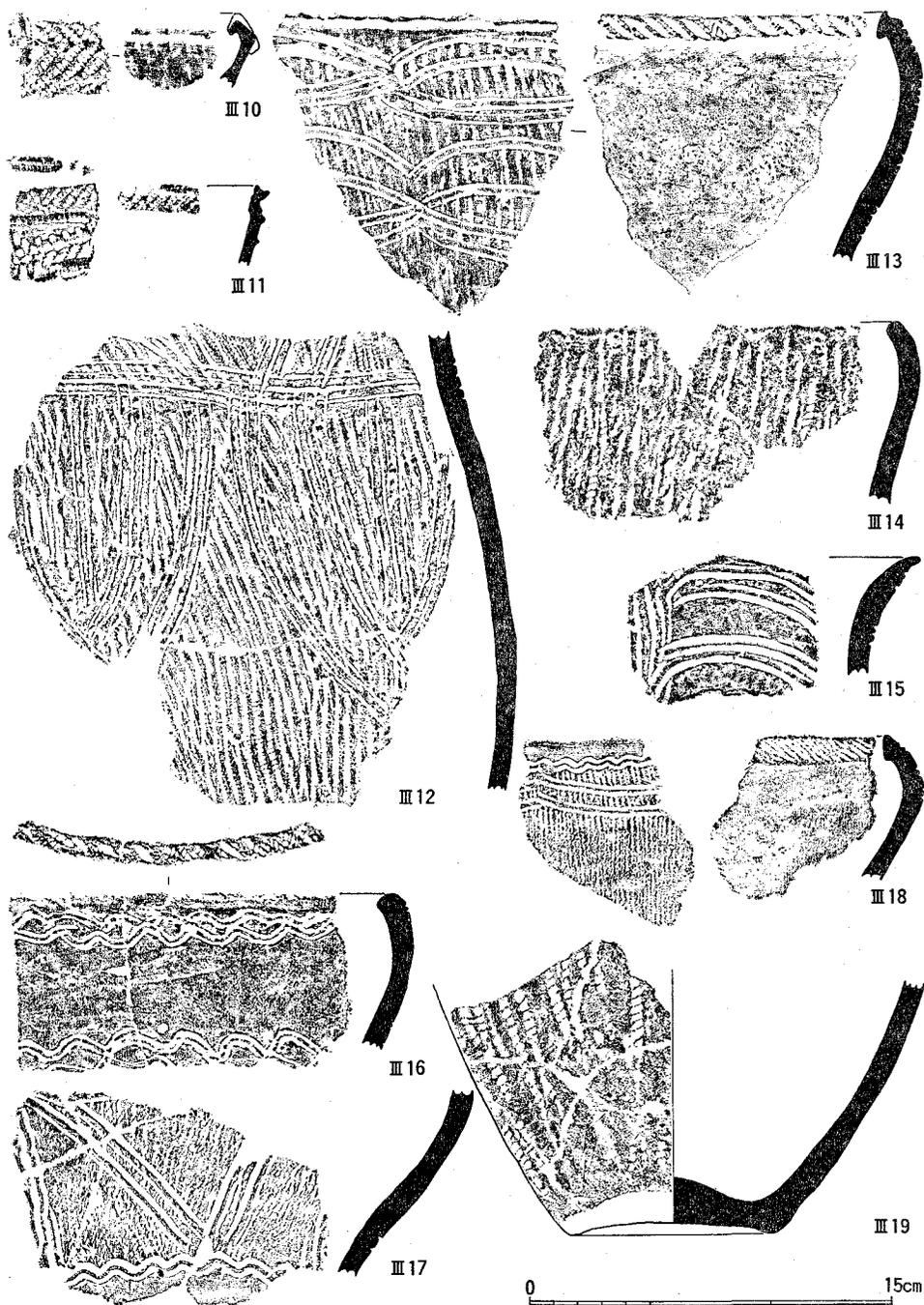


図37 TR 2 赤褐色粘質土出土の縄文土器 縮尺 1/3

が強く張る浅鉢で、胴部に押し引き沈線が1条めぐらされ、口縁部には焼成前の穿孔が4対つく。器面は丁寧な撫でて調整され、焼成もよく堅緻な土器である。Ⅲ9は口縁部が内傾する壺形土器で、胴上半部には縦方向の穿孔が施された橋状把手を4個もつ。以上の4点は中期末にあたる。

図37のⅢ10～Ⅲ19はTR 2 赤褐色粘質土出土の深鉢である。Ⅲ10は外面に縦の細い隆帯を貼付し、内面の口縁部直下に爪形文をめぐらせる北白川下層Ⅲ式土器、Ⅲ11は口縁上部に内外から逆方向の爪形文を施し、外面は縄文地に竹管文を付した隆帯がめぐる大歳山式土器である。赤褐色粘質土で前期にさかのぼる土器はこの2点のみで、大半を占めるのは船元式土器である。そのうち、低い隆帯上半を半截竹管文でなぞって文様を構成するⅢ12のような船元Ⅲ式土器は少量で、大部分は船元Ⅳ式土器である。深・浅・深の縄文地に半截竹管文を施すⅢ13・Ⅲ42(図版16)、縄文地のみで文様を施さないⅢ14、縄文をもたず半截竹管文だけで口縁部文様を構成するⅢ15と凹み底を呈し直線的に立ち上がる底部破片Ⅲ19などがそれにあたる。このほかに、厚手で内彎する口縁部に波状沈線文を数段施すⅢ16、キャリパー形の器形をなし、撚糸文地に半截竹管による波状文や直線文を施すⅢ17・Ⅲ18などの里木Ⅱ式土器が出土している。

図38はTR 1のSK 1, SB 1, SB 2から、図39はTR 1 黒褐色土, TR 2 黒褐色粘質土から出土した土器である。SK 1では、口縁部が内彎した撚糸文地に半截竹管による文様を施す里木Ⅱ式土器(Ⅲ20・Ⅲ21)が出土した。Ⅲ22～Ⅲ28はSB 1, Ⅲ29～Ⅲ31はSB 2出土の土器である。口縁部を中心に太い沈線で文様を構成する一群で、口縁部に沈線による区画をもうけ、これを羽状沈線文で埋める土器(Ⅲ24・Ⅲ25・Ⅲ31)とやや内傾する山形の口縁部をもつ土器(Ⅲ26・Ⅲ27)が特徴的である。Ⅲ22・Ⅲ23は縄文地に沈線文を連ね、Ⅲ29・Ⅲ30は波状口縁で沈線による区画文を施し、胴部には垂下する縄文帯と数条の沈線をもつ。Ⅲ28は口縁部を肥厚させ、胴部が「く」字状に屈曲する浅鉢である。このようにSB 1・SB 2出土土器は、中期末のもので占められる。

これと同様に、黒褐色土出土の土器も、大半が口縁部を沈線による文様で飾るもので、Ⅲ32～Ⅲ35・Ⅲ43(図版18)のような区画内を羽状沈線文で埋めるものと、Ⅲ36～Ⅲ38のような円形刺突文を充填する土器が多い。このほかに沈線文や押し引き沈線文を施すⅢ39・Ⅲ40などがある。Ⅲ41はやや上げ底となる底部で、平底となる土器も比較的多い。石器では石鏃、石錐、叩き石のほかに、切目石錘が比較的多く出土し、とくに前期中葉以前の土器を含む赤褐色粘質土から石錘3点が出土したことは注目される。



図38 SK 1 出土の縄文土器(Ⅲ20・Ⅲ21), SB 1 出土の縄文土器(Ⅲ22~Ⅲ28), SB 2 出土の縄文土器(Ⅲ29~Ⅲ31) 縮尺1/3

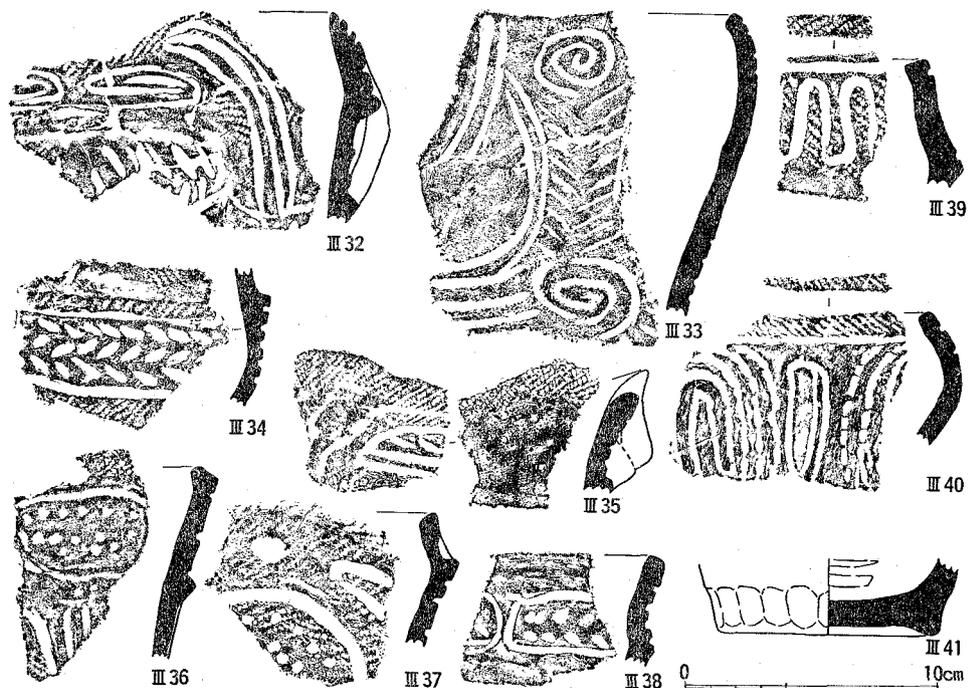


図39 TR 1 黒褐色土出土の縄文土器(Ⅲ34～Ⅲ37, Ⅲ39～Ⅲ41),
TR 2 黒褐色粘質土出土の縄文土器(Ⅲ32・Ⅲ33・Ⅲ38) 縮尺1/3

5 小 結

今回の調査では、住居跡2棟のほかその可能性のある土坑1基を検出するとともに、中期中葉と中期末の遺物を多量に採取することができた。これは昭和49年以降の周辺地域の調査と関連して、古くからその存在が知られていた北白川扇状地に立地する縄文時代の遺跡の具体的な様相を捉える上で大きな成果であった。焼土を充填した炉をともなう住居跡SB1と同様の形態をもつ遺構は、京都府城陽市森山遺跡で6例〔近藤77〕、大阪府藤井寺市林遺跡〔藤永81〕で1例発見されている。またSB2のような縄文中・後期に一般的な石囲炉をもつ遺構は兵庫県宍粟郡一宮町福野遺跡、奈良県山辺郡山添村広瀬遺跡〔松田82〕などに存在し、隅丸方形の住居跡に石囲炉をともなう形態はこの時期の典型的な遺構として貴重な資料となる。さらに中期末の遺構、遺物とともに、その下層で船元Ⅱ～Ⅳ式および里木Ⅱ式土器を多量に得たことも重要である。昭和49年以降の周辺の調査結果と総合し、今後隣接する地域の調査をつみ重ねて山城地方における縄文文化の研究をさらに深められることが期待される。